

# 第71回 全国高校演劇大会 (香川) 舞台技術創造講習 報告

2025年8月22日

2025年7月26日～7月28日に、香川県高松市のサンポートホール高松にて『第71回全国高等学校演劇大会』※1 (主催:全国高等学校演劇協議会)が開催され、同施設の第一小ホールで「舞台技術創造講習」が行なわれました。今年も猛暑に負けない熱心な生徒たちと、学びの多い講習会になりました。準備期間を含めた7月24日～7月28日の5日間にわたって行なわれたその講習会の様子をレポートします。



※1 総合文化祭としては49年目

## 【講師】

- 土屋 茂昭 (日本舞台美術家協会)
- 吉木 均 (日本舞台監督協会)
- 藤田 赤目 (日本舞台音響家協会)
- 金井大道具 (監修) 中村 知子 (背景) 谷口窓子、山本周平、能戸美由
- 土岐 研一 (同左)
- 乳原 一美 (日本照明家協会)
- 今井 春日 (同左)
- 大杉 良 (演出担当/日本演出者協会)
- 森本 繁樹 (全国高等学校演劇協議会)
- 長田 佳代子 (日本舞台美術家協会/本大会審査員)
- 上田 美和 (脚本担当顧問)
- 中島 憲 (全国高等学校演劇協議会)
- 森 啓次 ((株)四国舞台テレビ照明)

## 【会場】

香川県高松市 サンポートホール高松 第一小ホール

## 【日程】

7月24日～28日 仕込み&講習会準備  
7月29日 13:10～15:10 舞台技術講習会本番

## 【作品】

『ラスヴェト(夜明け前)』 脚本：上田 美和  
演出：大杉 良

## 【詳細日程】

日	時間	講師	内容	
7/24	10～13時 14～18時	土屋・土岐・吉木 乳原・藤田	・美術プランの説明と仕込み説明 ・装置作業 ・照明・音響仕込み準備	参加生徒： 13名
7/25	10～12時 13～14時半 15～18時	土岐・吉木 乳原・藤田・今井 中村・谷口・山本・能戸 全員	・作業続き(搬入口にて) ・照明準備・音響仕込み・音チェック ・金井大道具の背景講座・実習 ・作業続き・タツパ合わせ & 照明・音響作業	同上
7/26	18～20時	全員	・明かり作り 音響チェック	同上
7/27	17～20時	全員	・場当たり 通し稽古	同上
7/28	11～12時 12:50	全員	・通し稽古 x2 ・客入れ	同上
	13:10 13:20 13:50 14:50 15:10 15:30	土屋  大杉 上田 全プランナー	1.講習会趣旨説明 2.講師紹介 3.素バージョン(照明・音響なし) 上演 4.完成バージョン 上演 5.出演者紹介 6.台本解説 7.各プラン 解説 8.座談会・質疑応答 (審査員 佐々波氏合流) 9.バックステージ 案内 10.バラシ	同上

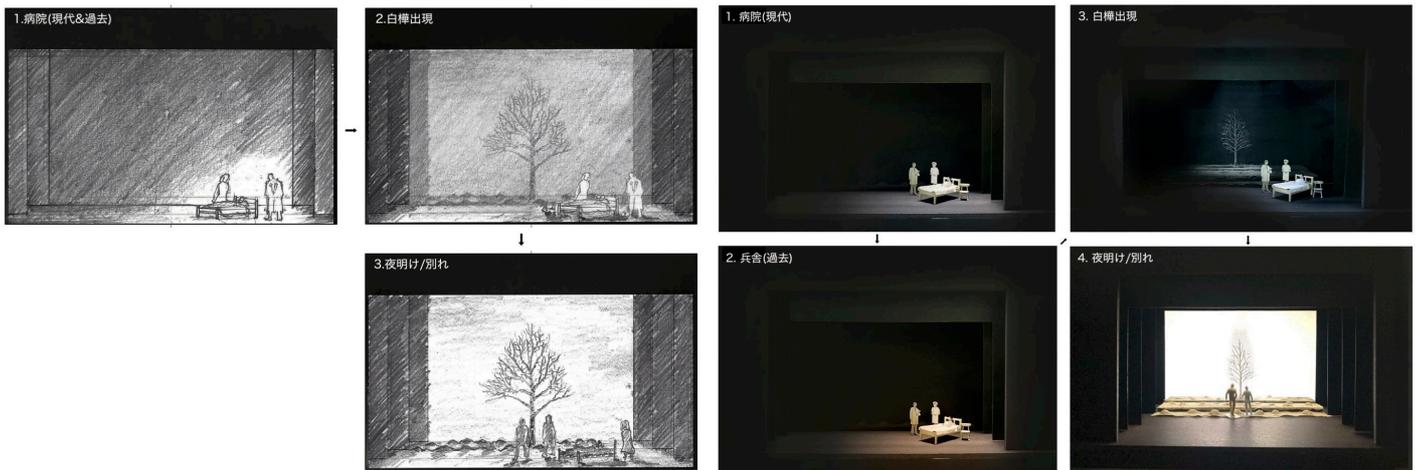
## 【美術プラン】

とある病院の一室。ひ孫娘に見守られながら老齢の男が最期を迎えようとしている。彼の脳裏に浮かぶのは、シベリア抑留の過酷な記憶。戦友や看護婦たちが次々と現れ、現代と過去が溶け合うように混じり合っていく中、やがて訪れる最期の瞬間、男が望むものとは――。

この作品は、極限の状況で生き抜いた人間の苦悩と、魂の救済を描いた物語です。

本作において重要なのは、現在の病室（そして過去のシベリア兵舎）という具体的な舞台と、ラストシーンに登場する白樺や墓標の「土饅頭」が象徴する心象風景とのスケール感の対比であると感じました。

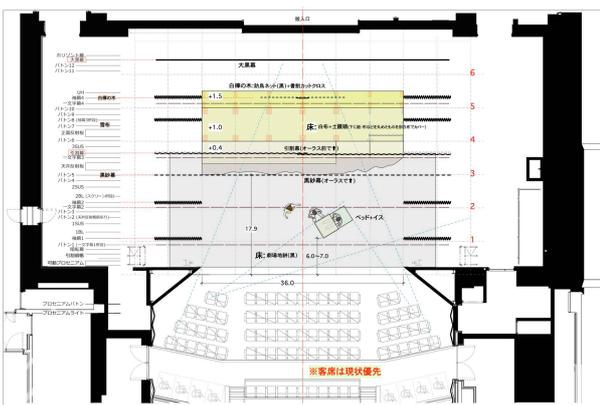
病室の装置はあえて簡素にとどめ、現代と過去を照明の変化によって滑らかにつなぐことで、観客を物語へ導いていく。そしてラストに現れる白樺には、脚本に記された「神々しさ」を宿らせ、三好の魂を包み込むような静謐で深いインパクトを持たせることが求められる。――まさにそこに、作品のドラマ性を最大限に引き出す美術デザインの核心があると感じました。



初期のラフスケッチ

模型写真によるストーリーボード

## 【仕込み用資料】



舞台平面図



白樺製作図解



土饅頭製作図解

前回同様、装置をどう生徒たちと作製するか？が課題でした。美術担当・土岐による土饅頭の製作図解の活用したり、舞台監督の吉木氏がベッドを、そして金井大道具が白樺のカットクロスの作業を下拵えしておくことにより、生徒たちの作業工程がスムーズに運ぶよう上手く調整しつつ、重要な作業の一端を担ってもらう段取りにしました。

ただし、装置が過度に大きくなると下拵えの負担も大きく、高校生が対応できる範囲のものを越えることもあります。今後の課題としては、生徒が主体的に関われる範囲を見極めつつ、現実的な作業量に収めていくことが挙げられました。

## 【講習の様子】

今回は日により増減がありましたが、7～30名の生徒が参加してくれました。少人数でも熱意は負けていません。



土屋氏の司会で始まる講習会



土岐氏による美術プランの説明



段ボールと新聞を使った床作りの作業



生徒たちに雪布の作業手順を教える吉木氏



キャストの高校生に演技の助言をする土屋氏



金井大道具 谷口氏と白樺の作業をする高校生

## 【舞台写真】

200名以上の来場者を迎えて、素バージョン・完全バージョンを上演し、講習会を開催しました。

参加者は上演に魅入り、講習会の内容に熱心に耳を傾けていました。バックステージツアーでも多くの顧問・生徒たちが装置・照明・音響の講師たちに質問を投げかけ、関心の高さを伺わせました。



病室のシーン



オーラスの白樺と土饅頭の側に佇む2人の男



沢山の来場者を迎えた会場の客席風景

## 【講習のポイントと全体評】

会場は丁度良いサイズで美術・照明・音響とすべての部門で効果的だったと思われます。

これまで同様「高校生参加者が自ら製作加工して塗装した素材が、実際の舞台上で使用する」ことを踏襲しました。白樺の木のカットクロスは作品にとって必須で有効な装置であったものの、平均的な高校演劇部での製作はハードルが高かったかもしれません。一方、雪原の「土饅頭」は白布、段ボール、新聞紙と手軽に入手できる素材での造形であり、今後も色々な素材を自ら試してみたいと思いました。

各講師(プランナー)による指導や講義に対しての生徒たちの熱心で自ら学ぼうとする姿勢は今回も素晴らしく、少人数のハンデを感じさせない講習会でした。しかし、県によっては演劇部の生徒の減少も多く、講習会の規模を柔軟に変えていく考えも必要になったと感じました。